令和５年度　伊那市立長谷中学校校評価表

学校関係者評価；（A：十分達成された　B：ほぼ達成された　C：不十分であった）　自己（項目間相対を加味した到達度）評価（a：十分達成された　b：ほぼ達成された　c：不十分であった）

学 校 教 育 目 標	重 点 目 標（中長期的目標）
学是「不撓不屈（ふとうふくつ）」 心豊かに たくましく 創造力溢れる生徒	○思いやりの心を育む。 ○自主的、自発的な学習態度を育み、学力、体力の向上を目指す。 ○自分で考え判断し行動できる力をつける。
	今 年 度 の 重 点 目 標
	⑴　地域に根ざした学習を通して「ふるさと長谷」に誇りと愛着を持つ生徒の育成 信州型コミュニティースクールの活動推進　～ふるさと長谷のために～ ・「暮らしの中の食」活動の推進　農業体験　給食の食材提供　食文化体験 ・地域の皆さんとの協働作業　花壇（花づくり）唐辛子栽培ラー油作り ・南アルプス太鼓、中尾歌舞伎公演の支援活動 ・音楽部の地域行事での発表
	⑵　人とのつながりを大切にし「思いやりの心」を育む生徒の育成 地域の交流拠点としての学校開放　～交流体験を通して学ぶ～ ・「長谷の縁側・縁日」、地域全戸への花苗の配付 ・サンハート美和（老人養護施設）へのふれあい訪問 ・くろゆり祭における地域参加型運動会　　・伊那養護学校との交流
	⑶　学びを生かして活用しようとする生徒の姿を目指して ～「学びに向かう力」を育む自らの学びを調整する授業・家庭学習のあり方～ ・教科書や自作ノート持ち込み可の定期テスト ・家庭学習のプランニング　　・一人一公開授業の実施による指導力向上 ・授業改善の推進（ICT 機器を活用した授業改善）

総　合　評　価
○生徒の「学校生活が楽しい」という評価項目の生徒到達度は 90%、保護者の「お子さんは学校生活に満足している」という評価項目の到達度は 80%だった。昨年度よりもさらに数値が上昇した。多くの生徒、保護者ともに長谷中学校での生活に満足している結果が得られた。 ○生徒の「地域との交流活動は、人とかかわる力や願いを実現する力など、私の力を伸ばすことに役立っている」の到達度は 88%であった。生徒自身が活動の価値を感じられている。また、「縁側活動や高齢者施設訪問、花壇づくりなどの活動は、生徒の豊かな心を育てることに役立っている」の保護者の到達度は 84%だった。地域連携を軸とした特色ある教育活動ができる本校の良さを今後も十分活かして、生徒の心身の成長と学力向上を図っていく。

成 果 と 課 題	評価	改 善 策 ・ 向 上 策
⑴「総合的な学習の時間」では、「長谷の太陽」にかかわる活動を軸に、学年ごとに地域素材を課題に据えて問題解決的な学習を行った。生徒会活動や行事等に主体的に参加しやりがいを感じていると答えた生徒は 91%である。地域に根ざした長谷中ならではの行事や学習に主体的に取り組むことができた。地域との関わる生徒会活動を中心に、活動の目的と手段について生徒とともに見返し、「作業を活動に」、「手段と目的を明確にする」ことを視点に計画・準備と運営の指導支援したところ、各活動が生徒主体の活動となってきている。	A a	○活動の目的と手段を見返し、地域で学び地域に貢献する活動を続けていく。「人の役に立つ」経験や自己効力感を感じる場面を大切にしつつ、自分で課題を設定し追究する場面を積極的に設けて「ふるさと長谷」への誇りと愛着をさらに高めたい。「長谷の縁側「地域交流の日」等の行事で生徒の創造性や自主性の育成を継続していきたい。 ○将来の夢がある生徒は 79%、地域や社会の役に立ちたいと思っている生徒は 92%であった。地域への思いをもって活動する生徒が多い中、今後も異なる立場に立って考えたり、多角的に考えたりする機会を設け、キャリア教育と連携させ展開していく。
⑵ 花壇作りや長谷地区内全戸パンジー配付活動は今年度も継続して実施し、地域の方と直接関わる機会となった。「ふれあい訪問」では、イベントでの依頼演奏や屋外や密を避けた太鼓演奏を届け、生徒たちの満足感も大きかった。伊那養護学校との交流は、両校の企画を持ち寄る形式で実施した。こうした豊かな心を育てる学習に対して保護者からも高評価（84%）を得た。	A a	○地域の方と関わる活動や福祉活動等については、主体的な取り組みを大切にしながら引き続き大切な情操教育として位置づけていく。生徒と地域の方々の安全・安心に留意しながら、これらの活動や職場体験、保育園・小学校と連携した防災訓練など地域の方やお年寄り、また園児や小学生とのふれあいをさらに充実させ「立場を変えて思考できる生徒の育成」を目指していく。
⑶「各教科の基礎的な力が身についてきている」の生徒到達度は 80%、「授業では自分から調べたり考えたりしている」が 87%と昨年度より向上した。一人一台端末が学習の道具としての利用が推進され、授業や持ち帰っての学習が定着した。しかし保護者の「お子さんは各教科の基礎的な学力が身についている」58%、「お子さんは授業が楽しく分かりやすいと感じている」が 67%と到達度が低調であり改善の必要性がある。	B b	○「主体的な学び」に関わる生徒の姿や捉えについて、職員研修を進めるとともに、同僚性を発揮した学び合う集団として、授業改善に努める。授業研究や公開授業、QU 研修会、全国学調分析研修などを窓口に研修と研究を進める。 ○端末の持ち帰りによる授業と連続性のある家庭学習の在り方やテストと評価の在り方、学びの複線化などについて協議し授業改善に取り入れていく。

領域	対象	評 価 項 目	評 価 の 観 点	成 果 と 課 題	評価	改 善 策 ・ 向 上 策
教育活動	教育課程	○楽しく成就感のある教育課程の展開	○個々の生徒につける力・伸ばす力を明確にした計画的な教育課程が展開できたか。	○「学校の行事や生徒会活動等は楽しい、やりがいがある」の到達度は生徒 91%だった。「目的と手段を見返す」「作業から活動へ」をテーマに、生徒会活動や総合的な学習等において昨年度からの取り組みの成果が現れてきている。	A b	○少人数を活かしてどの生徒にも新たな経験や責任ある立場を体験できるように具体目標を持たせて活動できるよう支援していく。一方で教科横断的な資質・能力や数字に表れない学力を高めるための指導のあり方についても研究していく。
		○主体的に取り組める教育活動の展開	○関心・意欲・態度の向上を目指しながら特色ある・魅力ある教育活動が展開できたか。	○「地域との交流活動は、人とかかわる力や願いを実現する力など、私の力を伸ばすことに役立っている」の生徒到達度は 88%と高水準を維持している。学校の活動全般への満足度に繋がっていると感じる。持続可能性を視点に見直しは行っていきたい。	A a	○生徒が自ら考え，自ら行動する機会や経験を増やし，教科で身につけた見方・考え方をいかした創造的な活動にしていきたい。また、保護者に生徒個々の努力や成果を多く伝え賞賛し認め合うことで次への意欲につなげていく。
	学習指導	○「分かる授業」「魅力ある授業」の実践	○教えること、考えることを明確にするとともに、学び合う場の設定や喜びを大切にしながら「分かった」「できた」という成就感を持って終える授業ができたか。	○「授業が楽しく分かりやすい」と感じる生徒は 84%であった。分かりやすさだけではなく、自ら学ぶ姿勢を育成するために、見方・考え方を活用して物事を見つめたり、各教科で学んだ学び方を複数の教科の学びに活用したりする機会を設けたい。	A b	○長谷中生の実態に合わせた授業改善の柱を決めだし全職員で取り組む。 ○今後の時代に生きる生徒たちにとって必要である「主体的対話的で深い学び」「思考力・判断力・表現力」を伸ばす授業とはどんなものかを今後も職員で共有する。
		○生徒の学力が定着し発展を目指す個別最適な学習の実践	○個々の課題を的確に把握し主眼を明確にしながら学習問題を位置づけ個々の生徒の力を伸ばす授業ができたか。	○「先生は分かるまで教えてくれる」の生徒到達度は 86%で上昇した。保護者到達度 64%と昨年度より下降した。「家庭でも自主的に勉強に取り組んでいる」は生徒 80%、保護者 61%で変化している。授業と連続した家庭学習などが一般化してきている。	B b	○定期テストや総合テストなどの分析を行い一人ひとりの実態に合わせた学習支援を行う。生徒が自ら学習を進められるよう、新しい試みを授業に取り入れていく。 ○小中連携を大切に９年間の学びを進めるとともに、保護者への説明を継続していく。
	部活動	○指導の改善における評価の実践	○指導の改善に生きる評価を的確に行うことができたか。	○研究主任を中心に「対話」を窓口に授業を行い全教科で指導主事から指導をうけた。同一学級で公開授業を行い、授業を見合うことにより、ねらいに応じた手立てや展開、協働的な学習の取り入れ方が見えてきた。	B b	○「ふりかえり」の場面で生徒がその時間の学びを振り返り、表現することができるように、小中学校が連携して取り組む。全国学調や総合学力調査を手がかりに、指導と評価の一体化をふまえた授業の視点や展開について研究する。
		○主体的に取り組める部活動の実践	○個々の目標を明確にしながら意欲的に部活動に取り組める指導ができたか。 ○生徒・保護者・他団体と連携を円滑にしながら活動を発展させることができたか。	○部活動の達成度は生徒 83%、保護者 79%だった。音楽部は花壇前での春と秋のコンサートを実施した。ソフトテニス部は少人数での活動であるが意欲的に活動している。ソフトテニス部は男女ともに中体連夏季大会で団体戦県大会へ進出した。	B a	○平日の活動は２時間、休日は３時間として生徒の健康と家庭での時間との折り合いをつけた活動を継続していく。部活動の地域移行については、県や市の方向と合わせるとともに、生徒の気持ちと長谷中の良さを生かした活動となるようにしていく。
	生徒指導	○生徒理解に基づいた個々の生徒への指導	○生徒の心情を大切にして、背景を考えながら指導すると共に報告・連絡・相談を密にしながら生徒指導ができたか。	○「教師が親身になって相談にのってくれる」の到達度は生徒が 80%、保護者 71%だった。生徒の援助希求力向上や希求先の複数化に向けて、雑談会の実施や学年での個別面談、生徒理解を重視し、生徒の気持ちにより添えるように取り組んでいきたい。	B b	○生徒面談の時間の確保や「何でも雑談会」等により生徒が相談できる機会を増やす。 ○小中連携やＱＵ検査・考察等の生徒理解をより個に寄り添った生徒指導を行う。 ○生徒指導や実態を共通理解し全職員で指導するために常に情報共有する。
		○教育活動との連携や人権感覚に基づいた適応指導	○「道徳授業」や「福祉活動」の実践及び人権感覚の育成ができたか。 ○いじめをしないさせない　みのがさない「思いやりの心」を育成できたか。	○年間を通じて養護教諭が生徒の SOS アンケートを実施し、実態をとらえるようにした。人権教育月間や道徳、学級活動から人権感覚の育成に努めた。地域交流や伊那養護学校との交流を通した相手意識の深化の場面を設け、生徒の姿の変化を感じている。	A a	○全教育活動において、人権意識の伸長を意図した指導と支援を継続して行う。自らの生き方を考える道徳教育や多様な人と一緒に社会を構成する意識の育成に一層力を入れて教材を使った道徳、他の領域とつながる道徳のカリキュラム作りに努める。
学校運	安全	○安全の保持	○学校の施設・設備は安全で学びやすい環境に整えられているか。	○「安全で学びやすい環境」についての到達度は生徒 87%、保護者 80%だった。校舎の破損箇所の早期の補修処理や、交通安全・感染症感染拡大防止策に関わる情報発信に効果があった。登下校時や休み時間に大地震が発生時の対処について全校で共有した。	A b	○毎月の「安全点検」を確実に実施し、修繕場所があれば関係各所と連絡をとり迅速な対応を実施する。避難訓練は場面や時間等条件を変更しリアルな訓練に向上させていく。また、今後学校以外でも生かすことができる防災意識を育てる。
		○安全の確保	○安全指導がきめ細かくなされ情報伝達も素早く行き渡り安全の確保がなされたか。	○保育園・小学校と共催で、中学校を一次避難場所とした保護者への児童生徒の引き渡し訓練を実施した。計画段階から小中で計画案を練り実施したことにより、児童生徒と保護者の実態に応じた引き渡し方法と課題が明らかになってきた。	A b	○保護者や地域、、長谷駐在所等と連携し安全に関わる対応を迅速に進める。「はせっこ見守り隊」「子どもを守る安心の家」「安全マップ」の更新を総合支所・公民館・長谷小学校と連携して行う。

営	地域との連携	○通信や授業参観等を通しての理解	○学校だよりや学年だより HP 等で学校の様子や現況を積極的に知らせたか。 ○授業参観・行事参観等を通して学習指導に関して保護者に理解してもらえたか。	○「学校は家庭や地域への情報提供、学校公開を積極的に行っている」に対する到達度は保護者到達度 81%、「縁側活動や高齢者施設訪問、花壇づくりなどの活動は、生徒の豊かな心を育てることに役立っている」は、保護者の到達度 84%だった。「学校は保護者の子育て上の相談に親身に応じている、応じる体制がある」は保護者到達度 71%だった。来校機会や情報発信を継続していきたい。	B b	○生徒が自ら考え自ら行動するための資質・能力の育成に向け、少人数の特色や地域交流の機会を活用し、生徒が具体目標を持ちながら活動できるよう支援していく。そのために、多方面にわたる教職員の研修機会を設け、生徒の身近なロールモデルとしての姿を探っていく。
		○学校から地域への発信と協力・連携関係の構築	○学校理解に向けて積極的な情報伝達を行い地域の方々との協力により豊かな教育活動の追究ができたか。	○「私は将来、地域や社会、知らない人の役に立ちたいと思っている」の生徒到達度は 91%、「お子さんは将来、地域や社会、知らない人の役に立ちたいと思っている、思ってきている」は保護者到達度 71%だった。生徒の到達度の高さは、地域の理解と協力の成果と感じている。保護者も地域の一員であるため、生徒の活動への参画を促し生徒の成長の姿を伝えていきたい。	A a	○「私は自分なりの将来の夢や目標をもっている」の生徒到達度（今年度 79%）を現在よりも高めるために（「お子さんはお子さんなりの長所やよさを自覚している、自覚してきている」保護者到達度 65%）、生徒を取り巻く大人の捉え方（保護者到達度）が多様となるための取り組みをＰＴＡと協力して進めていきたい。
	研修	○同僚性に基づいた研究・研修の実現	○研修会・研究会・各会議等が教育実践に効果的に作用しているか。 ○職員間の意志の疎通が図られ信頼関係に基づいた教育活動ができたか。	○「生徒・学級・学校・地域等の個性や特長を生かし、本校ならではの「特色ある教育活動」を展開している、しようとしている」と 92%の職員が回答している。「生徒は「できた」「分かった」「伸びた」「変わった」等の何らかの成就感をもって授業を終えることが多いと感じている」と 60%が回答している。	A b	○「生徒の個性や特性を捉え、個別最適な学びや協働的な学びを展開している、しようとしている」への「している」との職員回答（今年度 30%）の向上を目指し、管理職はＯＪＴ推進に向けた研究主任や教務主任へのサポートをすすめる。